

ApsaraDB for RDS

クイックスタート (SQL Server)

クイックスタート (SQL Server)

使用前の注意事項

機能上の制限

インスタンスの安定性とセキュリティを確保するために、RDS for SQL Serverには次のような制限があります。

1つのインスタンスで最大50のデータベースをサポートします。

データベースアカウントの最大数は500です。

一般アカウントは以下の特徴と制限があります：

- カスタム認証をサポートしていません。
- アカウントとデータベース管理インターフェイスはRDS管理コンソールにあります。
- 一般アカウントをサポートするインスタンスは管理アカウントを作成できます。
- SQL Server 2012のインターフェイスは一般アカウントをサポートしません。

管理アカウントは以下の特徴と制限があります：

- カスタム認証をサポートしています。
- アカウントとデータベース管理インターフェイスはRDS管理コンソールに表示されません。SQL文を使用して、アカウントもしくはデータベースを管理する必要があります。
- アカウントは一般アカウントに戻すことはできません。
- SQL Server 2012のインターフェイスはデフォルトで管理者アカウントを作成します。

コマンドラインからデータベースとアカウントを作成するための許可または許可はありません。

セキュリティ上の理由から、分散トランザクション、Windowsドメインアカウントのログイン、電子メール、BI分析、レポート、データベースレベルのDDLトリガー（テーブルの変更、テーブルの作成、追加/削除など）インデックス、その他のDDLステートメント）、アセンブリ、Service Broker、SQL Server Profiler、コピー、ポリシー管理、およびプロキシの開始/停止。

SQL Serverライセンス

現在、RDS for SQL Serverは、ライセンスを伴うインスタンスのみを提供します。つまり、インスタンスが作成されると、Microsoft SQL Server Enterprise Editionのライセンスが付与され、ユーザーによるライセンスの置き換えはサポートされません。

RDSを使用する一般的な手順

クイックスタートの目的

このドキュメントでは、RDSインスタンスの購入からインスタンスの使用までの手順を理解するのに役立つ、RDSインスタンス用のApsaraDBの作成方法、基本設定の実行方法、およびインスタンスデータベースへの接続方法について説明します。

ターゲットリーダー

ApsaraDB for RDSインスタンスを初めて購入したユーザー。

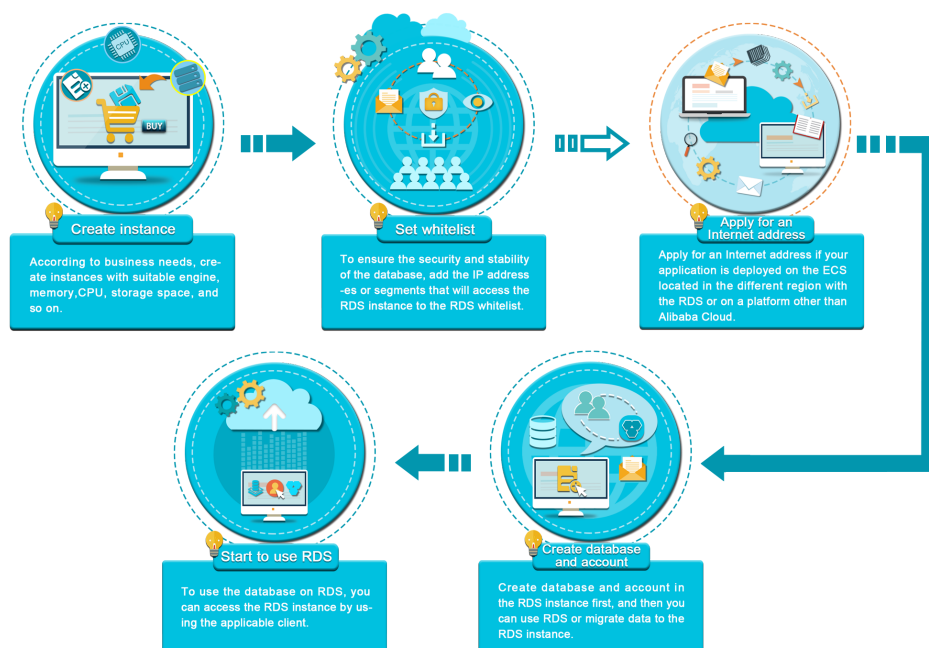
作成したインスタンスの基本設定を実行する必要があるユーザー。

ApsaraDB for RDSインスタンスに接続する方法を知りたいユーザー。

クイックスタートフローチャート

初めてAlibaba Cloud ApsaraDBをRDSに使用する場合は、「ApsaraDB for RDSの制限事項」と「ApsaraDB for RDSコンソール」を参照してください。

一般に、RDSインスタンスの購入からインスタンスの使用まで、次の操作を実行する必要があります。



インスタンスの作成

Alibaba Cloud ApsaraDB for RDS コンソールまたは API を使用して、ApsaraDB for RDS インスタンスを作成できます。インスタンスプルーシングの詳細については、「[ApsaraDB for RDS の価格設定](#)」を参照してください。このドキュメントでは、ApsaraDB for RDS コンソールを使用してインスタンスを作成する方法について説明します。API を使用してインスタンスを作成する方法の詳細については、「[RDS インスタンスの作成](#)」を参照してください。

前提条件

Alibaba Cloud アカウントに登録済みであること。

操作手順

RDS コンソールにログインします。

インスタンスリスト ページで、**インスタンスの作成** をクリックして、**インスタンスの作成** ページに入ります。

サブスクリプション または **従量課金** を選択してください。課金方法の詳細については、**価格の説明** を参照してください。

インスタンス構成を選択します。パラメータは次のように記述されます。

基本設定

リージョンとゾーン：選択リージョンとインスタンスが配置されているゾーン。単一のゾーンまたはマルチゾーンをサポートするリージョンもあれば、単一のゾーンのみをサポートするリージョンもあります。詳細については **リージョンとゾーン** を参照してください。

注：異なる地域の製品はイントラネットを介して相互に通信することはできず、インスタンスを購入した後でインスタンス領域を変更することはできません。そのため、リージョン選択するときは注意してください。

データベースエンジン：RDS は、MySQL、SQL Server、および PostgreSQL をサポートします。異なる地域では、異なるデータベースタイプがサポートされています。このドキュメントを使用する場合は、実際のインターフェイスを参照してください。

バージョン：データベースのバージョン。現在、RDS は MySQL 5.6、SQL Server 2008 R2、および PostgreSQL 9.4 をサポートしています。異なる地域で異なるデータベースのバージョンがサポートされています。このドキュメントを使用する場合は、実際のインターフェイスを参照してください。

MySQL データベースの場合、MySQL 5.6 を選択することをお勧めします。これは、データファイルの占有スペースを大幅に削減してストレージコストを削減できる TokuDB ストレージエンジンをサポートするためです。

SQL Server 2008 R2 および SQL Server 2012 (日本サイトでは未提供)では、さまざまな機能がサポートされています。詳細は **SQL Server 2008 R2 と SQL Server 2012 の機能の違い** を参照してください。

シリーズ：RDS インスタンスは、Basic Edition、High Availability Edition、および Finance Edition をサポートします。異なるデータベースバージョンは異なるシリーズをサポートします。このドキュメントを使用する場合は、実際のインターフェイスを参照してください。

ネットワークタイプ：RDS は従来のネットワークと仮想プライベートクラウド (VPC) をサポートします。あらかじめ VPC を作成する必要があります。また、インス

タンスの作成後にネットワークタイプを変更することもできます。詳細は、ネットワークタイプの設定を参照してください。

タイプ：インスタンスが占有する CPU およびメモリ。接続数と最大IOPS（読み書きの場合はそれぞれ測定され、混合読み書きの場合はベンチマークの最大 2 倍）は、タイプによって異なります。インスタンスタイプの詳細については、インスタンスタイプ一覧を参照してください。

ストレージ：ストレージスペースには、データ、システムファイル、bin ログファイル、およびトランザクションファイル用のスペースが含まれています。

サブスクリプション期間：サブスクリプションインスタンスの期間を設定します。

数量：購入する同じ構成のインスタンスの数。

今すぐ購入 をクリックして **注文の確認** ページに入ります。

[サービス利用規約とサービスレベル通知に同意します] の横にあるチェックボックスをオンにしてから：

インスタンスの請求方法がサブスクリプションの場合は、**支払い** をクリックします。

インスタンスの請求方法が従量課金の場合は、**有効化** をクリックします。

初期設定

ホワイトリストを設定する

ホワイトリストは、指定されたIPアドレスおよび特定のIPセグメントへのアクセスを制限するために使用されます。ホワイトリストが設定されていない限り、データベースインスタンスにアクセスすることはできません。RDSのセキュリティを維持するために、要件に応じてホワイトリストを定期的に確認して調整することをお勧めします。この章では、主にホワイトリストを設定する方法を紹介します。

背景

イントラネット、インターネット、またはイントラネットとインターネットの両方を介してRDSインスタン

スにアクセスできます。各接続タイプ（イントラネットとインターネット）の適用シナリオの詳細については、イントラネットアドレスとインターネットアドレスの設定を参照してください。

接続タイプを設定する前に、アプリケーションサービスのIPアドレスまたはIPセグメントまたはECSインスタンスをRDSインスタンスのホワイトリストに追加する必要があります。ホワイトリストが設定されると、システムは自動的にRDSインスタンスのイントラネットアドレスを生成します。インターネットアドレスが必要な場合は、インターネットアドレスの申請の詳細な手順を参照してください。

注意：アプリケーションサービスのIPアドレスをホワイトリストに追加した後にRDSインスタンスに接続できない場合は、アプリケーションサービスの実際のIPアドレスを取得する必要があります。

注意

システムは、新しく作成したRDSインスタンスごとに**デフォルト**ホワイトリストグループを自動的に作成します。この**デフォルト**ホワイトリストグループは、変更または消去のみできますが、削除することはできません。

新しく作成されたRDSインスタンスごとに、ローカルループバックIPアドレス127.0.0.1がデフォルトの**ホワイトリストグループ**にデフォルトで追加されます。これは、すべてのIPアドレスまたはIPセグメントがこのRDSインスタンスにアクセスすることを禁止されていることを意味します。したがって、他のIPアドレスまたはIPセグメントをRDSホワイトリストに追加する前に、まず**デフォルト**ホワイトリストグループから127.0.0.1を削除する必要があります。

%または0.0.0.0/0は、IPアドレスがRDSインスタンスへのアクセスを許可されていることを示します。この構成では、データベースのセキュリティが大幅に低下するため、お勧めしません。

操作手順

RDSコンソールにログインします。

選択リージョンターゲット・インスタンスが配置されている場所。

ターゲットインスタンスの名前をクリックすると、**基本情報**ページに移動します。

左側のナビゲーションバーで **セキュリティコントロール** を選択して **セキュリティコントロール** ページにアクセスしてください。

ホワイトリスト設定 タブページで、**デフォルト** ホワイトリストグループの**変更** をクリックします（次の図を参照）。

注意：カスタムホワイトリストグループをRDSインスタンスに追加する場合は、**デフォルト** ホワイトリストグループの**クリア**をクリックして、IPアドレス127.0.0.1を最初に削除してから、**ホワイトリストグループを追加**をクリックします。カスタムホワイトリストの設定手順は、次の手順と似ています。

セキュリティコントロール

ホワイトリストの設定	SSL
→ ホワイトリストグループを追加	
default 変更 クリア	
127.0.0.1	

注意: IP ホワイトリストは、0.0.0.0/0 を指定するとすべてのアクセスを許可してしまいます。また、127.0.0.1 アドレスを指定すると、このアドレス以外の外部アクセスを拒否することができます。 [ホワイトリスト設定の説明](#)

グループの変更ページで、**ホワイトリストフィールド**のRDSインスタンスにアクセスするIPアドレスまたはIPセグメントを追加します。ECSイントラネットIPアドレスを追加する必要がある場合は、次の図に示すように、[**ECSイントラネットIPアドレスのアップロード**]をクリックし、プロンプトに従ってIPアドレスを選択します。

グループを変更する

グループ名:

default

ホワイトリスト:

127.0.0.1

ECS の IP アドレスをアップロード

最大のホワイトリスト数 999

コンマ区切りの IP アドレス (例: 192.168.0.1,192.168.0.2)
[ローカル IP を取得する方法](#)

The whitelist takes effect in 1 minute.

OK

キャンセル

パラメータの説明：

グループ名：小文字、数字またはアンダースコアを含む2～32文字を含むことができます。グループ名は、小文字で始まり、文字または数字で終わらなければなりません。この

名前は、ホワイトリストグループが正常に作成されたときは変更できません。

ホワイトリスト：RDSインスタンスにアクセスできるカスタムIPアドレスまたはIPセグメントを入力できます。

- 10.10.10.0/24などのIPセグメントを入力すると、10.10.10.Xという形式のIPアドレスがRDSインスタンスにアクセスできることを示します。

複数のIPアドレスまたはIPセグメントを入力する必要がある場合は、192.168.0.1,172.16.213.9など、コンマで区切ります（空白を追加しないでください）。

- ホワイトリストグループごとに、MySQL、PostgreSQLインスタンスに対して最大1,000のIPアドレスまたはIPセグメントを設定できます。SQL Serverインスタンスには最大800まで設定できます。

ECSイントラネットIPアドレスのアップロード：このボタンをクリックすると、ECSイントラネットIPアドレスを追加する簡単な方法である、RDSインスタンスと同じアカウントのECSインスタンスのイントラネットIPアドレスを選択できます。1. **OK** をクリックします。

ホワイトリストグループを変更または削除する

ビジネス要件に応じて、ホワイトリストグループを変更または削除することができます。詳細な操作手順は次のとおりです。

RDSコンソールにログオンします。

選択リージョンターゲット・インスタンスが配置されている場所。

ターゲットインスタンスの名前をクリックすると、**基本情報**ページに移動します。

左側のナビゲーションバーで **セキュリティコントロール** を選択して **セキュリティコントロール** ページにアクセスしてください。

ホワイトリストの**設定**タブページで、対象のホワイトリストグループの**変更**または**削除**をクリックします。

IPアドレスまたはIPセグメントを変更したら、**[OK]** をクリックします。または、削除するホワイトリストグループであることを確認する場合は、**[確認]** をクリックします。

インターネットアドレスの申請

アプリケーションのデプロイ先の ECS インスタンスが、RDS インスタンスと同じリージョン内にあり、RDS インスタンスと同じネットワークタイプを持つ場合、インターネットアドレスは必要ありません。アプリケーションのデプロイ先の ECS が、RDS インスタンスと異なるリージョン内にあるか、RDS インスタンスと異なるネットワークタイプを持つ場合、または、アプリケーションが Alibaba Cloud 以外のプラットフォームにデプロイされる場合、RDS インスタンスにアクセスするにはインターネットアドレスが必要です。

注意: 同じリージョンにあるインスタンスはイントラネット経由で互いに通信できます (ゾーンは異なってもかまいません)。

背景情報

RDS では、イントラネットアドレスとインターネットアドレスを介した接続が利用できます。接続モードとインスタンスタイプにより、接続アドレスの選択は次のような違いがあります。

インスタンスシリーズ	インスタンスバージョン	アクセスモード	接続アドレス
基本シングルノードエディション	- MySQL 5.7 - SQL Server 2012	標準モード	- イントラネットアドレス - インターネットアドレス - イントラネットアドレスとインターネットアドレス
HA デュアルノードエディション	- MySQL 5.5/5.6 - SQL Server 2008 R2 - PostgreSQL 9.4 - PPAS 9.3	標準モード	- イントラネットアドレス - インターネットアドレス
		安全接続モード	- イントラネットアドレス - インターネットアドレス

			ス - イントラネットアドレスとインターネットアドレス
財務エディション	MySQL 5.6	標準モード	- イントラネットアドレス - インターネットアドレス
		安全接続モード	- イントラネットアドレス - インターネットアドレス - イントラネットアドレスとインターネットアドレス

それぞれの接続アドレスを適用できるシナリオは次のとおりです。

イントラネットアドレスのみを使用:

イントラネットアドレスはデフォルトで提供され、接続アドレスは直接変更できます。

アプリケーションのデプロイ先の ECS インスタンスが、RDS インスタンスと同じリージョン内にあり、RDS インスタンスと同じネットワークタイプを持つ場合、この接続方法を適用できます。

インターネットアドレスのみを使用:

アプリケーションのデプロイ先の ECS インスタンスが、RDS インスタンスのリージョンと異なるリージョン内にある場合、この接続方法を適用できます。

アプリケーションが Alibaba Cloud 以外のプラットフォームにデプロイされる場合、この接続方法を適用できます。

イントラネットアドレスとインターネットアドレスを両方使用:

アプリケーションが、異なるリージョンにある複数の ECS インスタンスにデプロイされ、そのうちのある ECS インスタンスが、RDS インスタンスと同じリージョン内にあり、RDS インスタンスと同じネットワークタイプを持つ場合、この接続方法を適用できます。

アプリケーションのデプロイ先の ECS インスタンスが、RDS インスタンスと同じリージョン内にあり、RDS インスタンスと同じネットワークタイプを持ち、さらにアプリケーションが Alibaba Cloud 以外のプラットフォームにデプロイされる場合、この接続方法を適用できます。

注意

データベースにアクセスする前に、データベースへのアクセスに使用する IP アドレスまたは IP セグメントをホワイトリストに追加する必要があります。詳細については、「[ホワイトリストの設定](#)」を参照してください。

トラフィック料金はインターネットアドレスを使用した接続に対して発生します。価格と料金の詳細については、[RDS の料金ページ](#)を参照してください。

インターネットアドレスを使用して RDS インスタンスに接続する場合、インスタンスのセキュリティが低下する可能性があります。この方法は慎重に使用してください。伝送速度とセキュリティレベルの向上のために、アプリケーションを RDS と同じリージョンの ECS インスタンスに移行することをお勧めします。

操作手順

RDS コンソールにログインします。

対象のインスタンスが存在するリージョンを選択します。

対象のインスタンスの ID をクリックして、[\[基本情報\]](#) ページに移動します。

左側のナビゲーションバーで [\[データベースの接続\]](#) を選択して、[\[データベースの接続\]](#) ページに

移動します。

次の図に示された [インターネットアドレスの取得] をクリックします。



表示された確認ウィンドウで、[OK] をクリックしてインターネットアドレスを生成します。

[接続アドレスの変更] をクリックし、インターネットまたはイントラネットの接続アドレスおよびポートを変更します (下図を参照)。

接続アドレスの変更

接続タイプ:

イントラネットアドレス ▼

接続アドレス:

rm-qx2kiqd7lgikmfkwd .mysql.rds.aliyuncs.com

アルファベットと数字で構成され、最初の文字には小文字のアルファベットを使用します。長さの範囲は 8 ~ 30 文字です。

ポート:

3306

ポート番号の範囲: 3200 ~ 3999

OK

キャンセル

パラメーターの説明:

接続タイプ: 変更する接続タイプに応じて、[イントラネットアドレス] または [インターネットアドレス] を選択します。

接続アドレス: アドレス形式は、xxx.mysql.rds.aliyuncs.com で、xxx はユーザー定義フィールドです。アドレスは、アルファベットと数字で構成された 8 ~ 64 文字で指定できます。先頭の文字は小文字のアルファベットである必要があります。

ポート: RDS が外部サービスを提供するポートの番号を指定します。[3200, 3999] の範囲の整数を指定できます。

[OK] をクリックします。

インスタンス基本設定

説明：SQL Server 2008 の操作手順の例を説明します。SQL Server 2008 R2 を使用する場合は、データベースとアカウントの作成 (SQL Server 2012) を参照してください。

RDS インスタンスを利用するには、データベースとアカウントの作成が必要です。SQL Server 2008 R2 の場合、RDS コンソールでデータベースとアカウントの作成が可能です。本ドキュメントは SQL Server 2008 R2 にデータベースとアカウントの作成手順を紹介します。

背景情報

1 つのインスタンスのデータベースでは、このインスタンスのすべてのリソースが共有されます。SQL Server 2008 R2 タイプのインスタンスには、最大 50 データベース、500 アカウントまで作成できます。

ローカルデータベースを RDS に移行する際は、RDS データベースとローカルデータベースで一致する移行アカウントとデータベースをそれぞれ作成する必要があります。

アカウント権限を設定する際、最小権限と業務ロールで行い、読取り専用/書込み権限を適切に設定します。必要な場合、更に区分して各アカウントは該当業務内のデータのみアクセス可能にします。書込みの必要がないアカウントには、読取り専用権限を付与します。

データベースセキュリティのため、アカウントパスワードの強度を高くし、定期的に変更します。

操作手順

[RDS コンソール] にログインします。

対象のインスタンスが存在するリージョンを選択します。

対象のインスタンスの名前をクリックして、[基本情報] ページに移動します。

左側のメニューで **アカウント管理** を選択し、[アカウント管理] ページに移動します。

アカウント作成 をクリックします。

アカウント一覧

新規アカウント

アカウント

ステータス

関連付けられたデータベース

アカウントの説明

アクション

① 条件を満たすレコードが見つかりません。

アカウント情報を入力します。

データベースアカウント:

小文字のアルファベット、数字、アンダースコアで構成され、先頭にアルファベットを使用し、末尾にアルファベットまたは数字を使用します。使用できる文字数は最大 16 文字です。

許可済みデータベース:

未許可のデータベース

許可済みデータベース

権限 すべて設定 読み取り/書き込み

00000

一時的にデータが存在しません。

許可 >

< 削除

*パスワード:

長さは 8 ～ 32 文字で、大文字、小文字、数字、特殊記号の三種類以上が必要です。特殊記号には下記が含まれます: @#\$%^&* (_+-=)!

*パスワードの確認:

備考:

補足を入力してください。入力できる文字数は最大 256 文字です (漢字 1 文字は 3 文字に相当します)。

最大 500 アカウントまで作成可能です

OK キャンセル

項目説明：

データベースアカウント：アカウント名、長さは 2~16 文字、小文字のアルファベット、数字、アンダースコアで構成され、先頭にアルファベットを使用し、末尾にアルファベットまたは数字を使用します。

許可済みデータベース：アカウントにアクセス許可したデータベースです。データベースが作成されてない場合、空欄で可能です。1 つのアカウントに複数のデータベースを許可することは可能です。許可手順は下記となります。

未許可のデータベース から許可するデータベースを選択します。

許可 をクリックし、許可済みデータベース に追加します。

各データベースに、読み取り/書き込み または 読み取り専用 を設定できます。全部のデータベースに同じ権限を付与する場合、すべて 読み取り/書き込み または すべて 読み取り専用 で設定できます。

許可済みデータベース	権限	すべて設定 読み取り/書き込み
aaaa	☒ 読み取り/書き込み	☐ 読み取り専用

パスワード: アカウントのパスワードを指定します。パスワードは 8 ~ 32 文字で、大文字、小文字、数字、特殊文字を使用できます。パスワードには、これら 4 種類の文字のうち、3 種類以上使用する必要があります。

パスワードの確認: パスワードを再度入力して、正しいことを確認します。

備考: アカウントの説明を入力できます。最大 256 英文字まで可能です。

OK をクリックし、アカウント作成完了です。

左側のメニューで **データベース管理** を選択し、[データベース管理] ページに移動します。

データベースを作成 をクリックします。



データベース情報を入力します。

***データベース (DB) 名:**

小文字のアルファベット、数字、アンダースコア、取り消し線で構成され、先頭にアルファベットを使用し、末尾にアルファベットまたは数字を使用します。使用できる文字数は最大 64 文字です。

***サポートされる文字コード:** ☒ Chinese_PRC_CI_AS ☐ Chinese_PRC_CS_AS ☐ SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS ☐ SQL_Latin1_General_CP1_CS_AS ☐ Chinese_PRC_BIN

☐ 全て

許可されたアカウント:

現在許可されているアカウント:fortest

fortest

アカウントを作成する

アカウントタイプ: ☒ 読み取り/書き込み ☐ 読み取り専用

補足:

補足を入力してください。入力できる文字数は最大 256 文字です (漢字 1 文字は 3 文字に相当します)。

OK キャンセル

項目説明：

データベース (DB) 名：小文字のアルファベット、数字、アンダースコア、取り消し線で構成され、先頭にアルファベットを使用し、末尾にアルファベットまたは数字を使用します。使用できる文字数は最大 64 文字です。

サポートされる文字コード：データベースのサポートされている文字セットを参照します。適切な文字セットを必要に応じて選択します。

許可されたアカウント：許可するアカウントを選択します。アカウントが作成されていない場合、空欄で可能です。

アカウントタイプ：許可されたアカウントを選択後表示されます。アカウントがデータベースへの権限を設定します。**読み取り/書き込み** または **読み取り専用** に設定できます。

補足：データベースの説明を入力できます。最大 256 英文字まで可能です。

OK をクリックし、データベース作成完了です。

注意: この記事は、SQL Server 2012 インスタンスにのみ適用されます。SQL Server 2008 R2 インスタンス用のデータベースおよびアカウントを作成する方法については、「SQL Server 2008 R2 用のデータベースとアカウントの作成」を参照してください。

RDS を使用するためには、RDS インスタンスでデータベースとアカウントを作成する必要があります。SQL Server 2012 インスタンスの場合は、RDS コンソールで初期アカウントを作成する必要があります。その後で、クライアントからデータベースを作成し、管理できます。この記事では、Microsoft SQL Server

Management Studio (SSMS) クライアントを例として使用して、SQL Server 2012 インスタンスのデータベースとアカウントを作成する方法を説明します。

背景情報

同一インスタンス内のデータベースは、このインスタンスのすべてのリソースを共有します。各 MySQL 5.7 インスタンスは、1 つの初期アカウント、無制限の一般アカウント、無制限のデータベースをサポートしています。SQL 文を使用して一般アカウントとデータベースを作成して管理する必要があります。

ローカルデータベースを RDS に移行するには、RDS インスタンスにローカルデータベースと同じデータベースおよびアカウントを作成する必要があります。

各データベースのアカウントに権限を割り当てる際は、最小権限の原則とサービスロールに従ってアカウントを作成し、読み取り専用および読み取り/書き込み権限を合理的に割り当てます。必要に応じて、アカウントとデータベースをさらに小さく分割して、各アカウントが自身のサービスに関係するデータにのみアクセスできるようにすることができます。アカウントがデータをデータベースに書き込む必要がない場合は、読み取り専用権限を割り当てます。

データベースを安全に保護するために、アカウントに強力なパスワードを設定し、パスワードを定期的に変更します。

操作手順

[RDS コンソール]にログインします。

対象のインスタンスが存在するリージョンを選択します。

インスタンスの ID をクリックして、[基本情報] ページに移動します。

左側のナビゲーションバーで [アカウント管理] をクリックして、[アカウント管理] ページに移動します。

次の図に示された [アカウント作成] をクリックします。

アカウント管理

アカウント一覧 特権アカウント

更新 アカウント作成 特権アカウントを作成する

アカウント	ステータス	関連付けられたデータベース	アカウントの説明	アクション
① 条件を満たすレコードが見つかりません。				

作成するアカウントの情報を入力します (下図を参照)。

[アカウントを作成する](#) [アカウント管理に戻る](#)

データベースアカウント:

小文字のアルファベット、数字、アンダースコアで構成され、先頭にアルファベットを使用し、末尾にアルファベットまたは数字を使用します。使用できる文字数は最大 16 文字です。

許可済みデータベース:

未許可のデータベース	許可済みデータベース	権限	すべて設定	読み取り/書き込み
データなし	一時的にデータが存在しません	許可 > < 削除		

*パスワード:

長さは 8 ~ 32 文字で、大文字、小文字、数字、特殊記号の三種類以上が必要です。特殊記号には下記が含まれます:
@#%\$%^&*(_+~=)

*パスワードの確認:

パラメーターの説明:

データベースアカウント: 初期アカウント名を表します。2 ~ 16 文字 (小文字のアルファベット、数字、アンダースコアを含む) で指定できます。先頭はアルファベット、末尾はアルファベットか数字にする必要があります。

パスワード: 初期アカウントのパスワードを指定します。少なくとも次の 3 種類の文字を含む 8 ~ 32 文字で指定できます。

大文字のアルファベット

小文字のアルファベット

数字

特殊文字 (!@#%\$%^&*()_+~=)

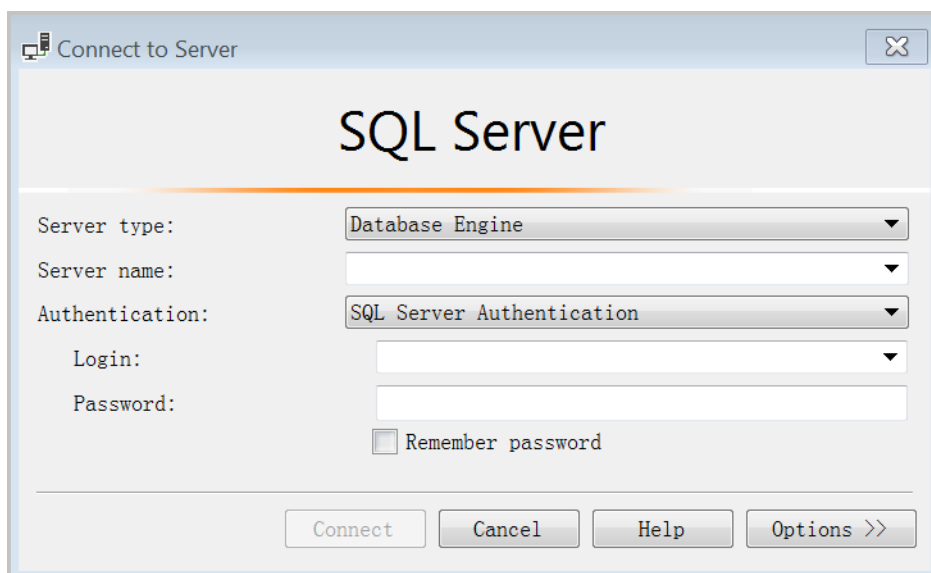
パスワードの確認: 正しく入力されていることを確認するためにパスワードをもう一度入力します。

[OK] をクリックして、初期アカウントの作成は終了です。

RDS インスタンスにアクセスする IP アドレスを、RDS のホワイトリストに追加します。ホワイトリストの設定方法については、「[ホワイトリストの設定](#)」を参照してください。

Microsoft SQL Server Management Studio クライアントを起動します。

接続情報を入力します (下図を参照)。



パラメーターの説明:

Server type: **[Database Engine]** を選択します。

Server name: RDS インスタンスのインターネットアドレスまたはイントラネットアドレスと、それに対応するポート番号で構成されます。接続アドレスとポート番号は `rm-bptest.sqlserver.rds.aliyuncs.com,3433` のようにカンマで区切る必要があります。RDS インスタンスの接続アドレスとポート情報を表示する手順を次に示します。

[RDS Console] にログインします。

対象インスタンスのリージョンを選択します。

インスタンスのIDをクリックして、「**基本情報**」ページにアクセスします。

[**基本情報**] ページでは、インスタンスのインターネット/イントラネットアドレスとインターネット/イントラネットポート番号を確認できます。

基本情報		ホワイトリストの設定	移行ゾーン	↑
インスタンス ID: rm-00000000000000000000	名前: rm-00000000000000000000			
インスタンスのリージョンとゾーン: Asia Pacific NE 1 (Japan)ゾーンA	インスタンスタイプ: 標準インスタンス (rds.status.category.HighAvailability)			
イントラネットアドレス: rm-00000000000000000000.mssql.japan.rds.aliyuncs.com	内部ポート: 3433			
インターネットアドレス: rm-00000000000000000000.mssql.japan.rds.aliyuncs.com	外部ポート: 3433			

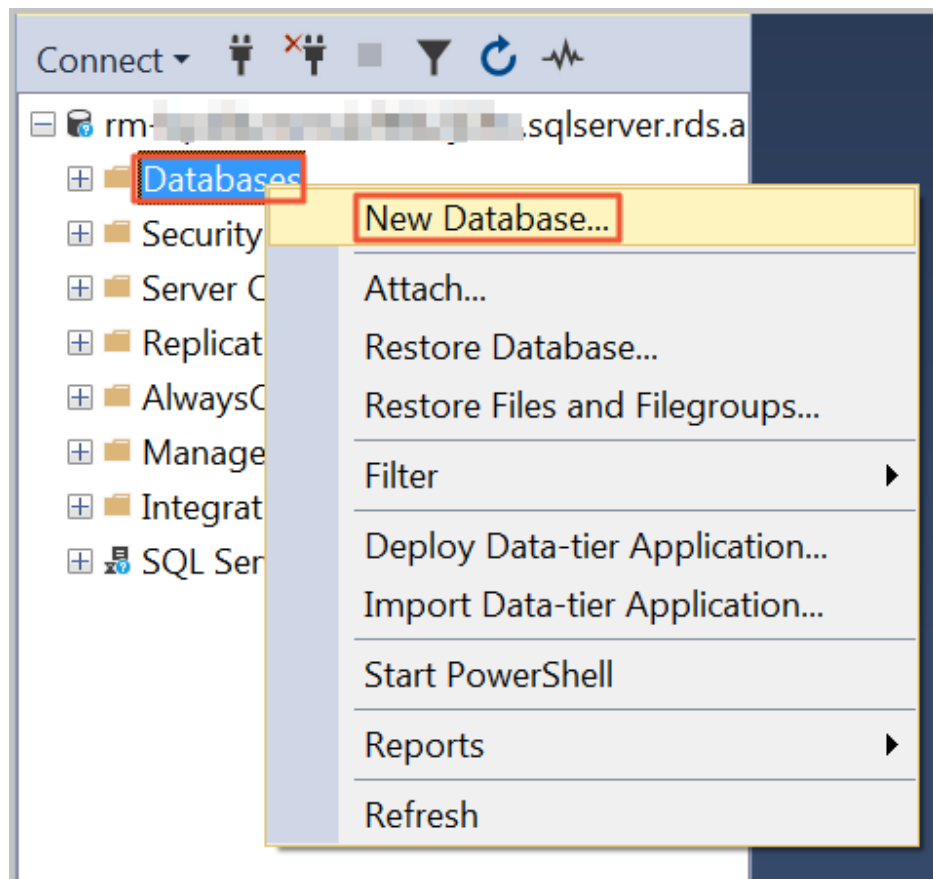
Authentication: **[SQL Server Authentication]** を選択します。

Login: RDS インスタンスの初期アカウント名を指定します。

Password: RDS インスタンスの初期アカウントに対応するパスワードを指定します。

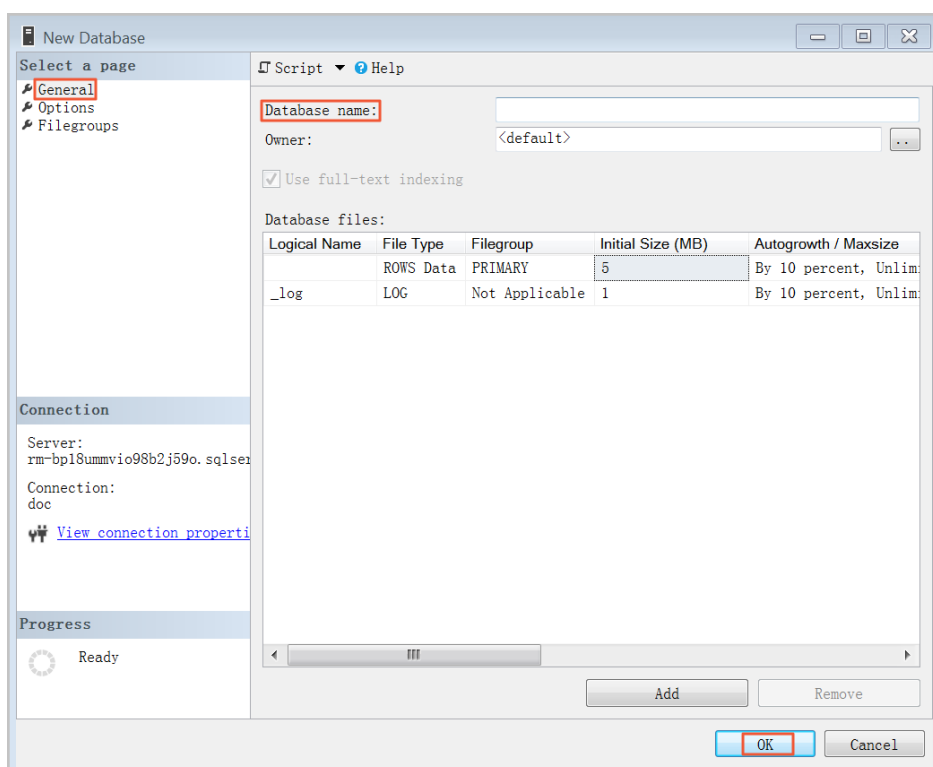
[Connect] をクリックします。

[Databases] を右クリックして、**[New Database]** を選択します。



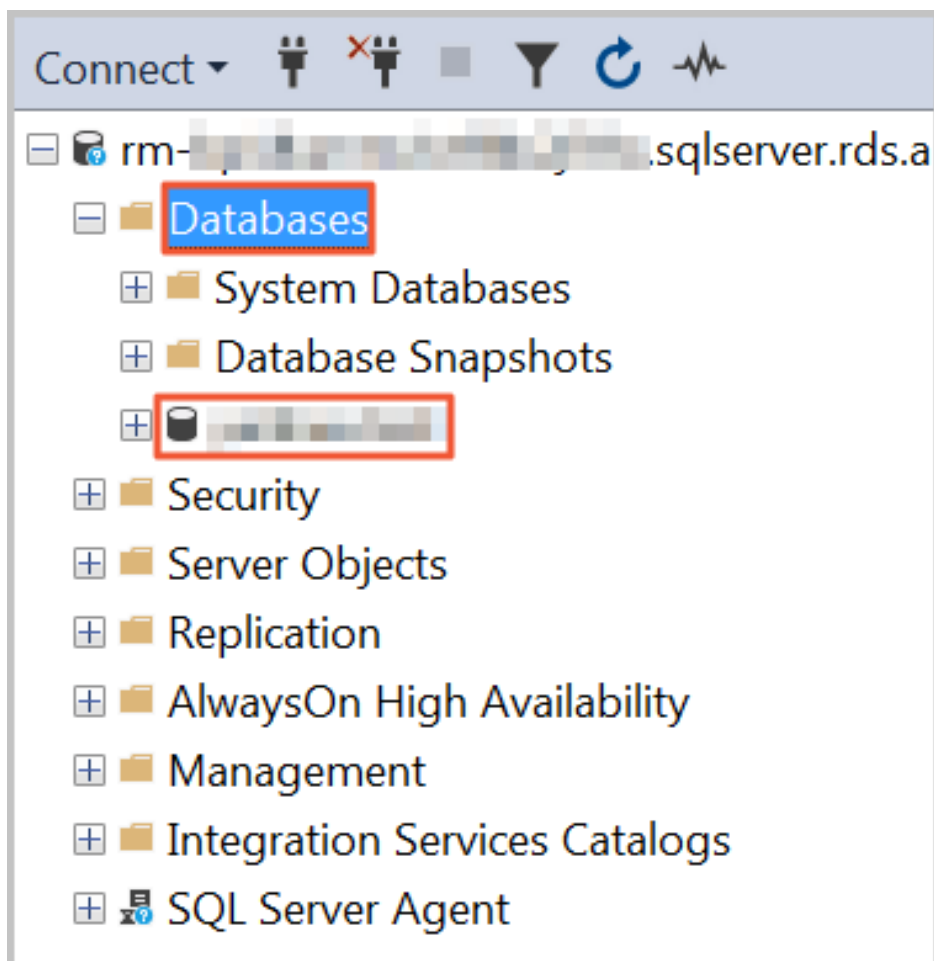
[New Database] ウィンドウで、**[General]** タブページを選択します。

Database name フィールドに新しいデータベースの名前を入力し、**[OK]** をクリックします。

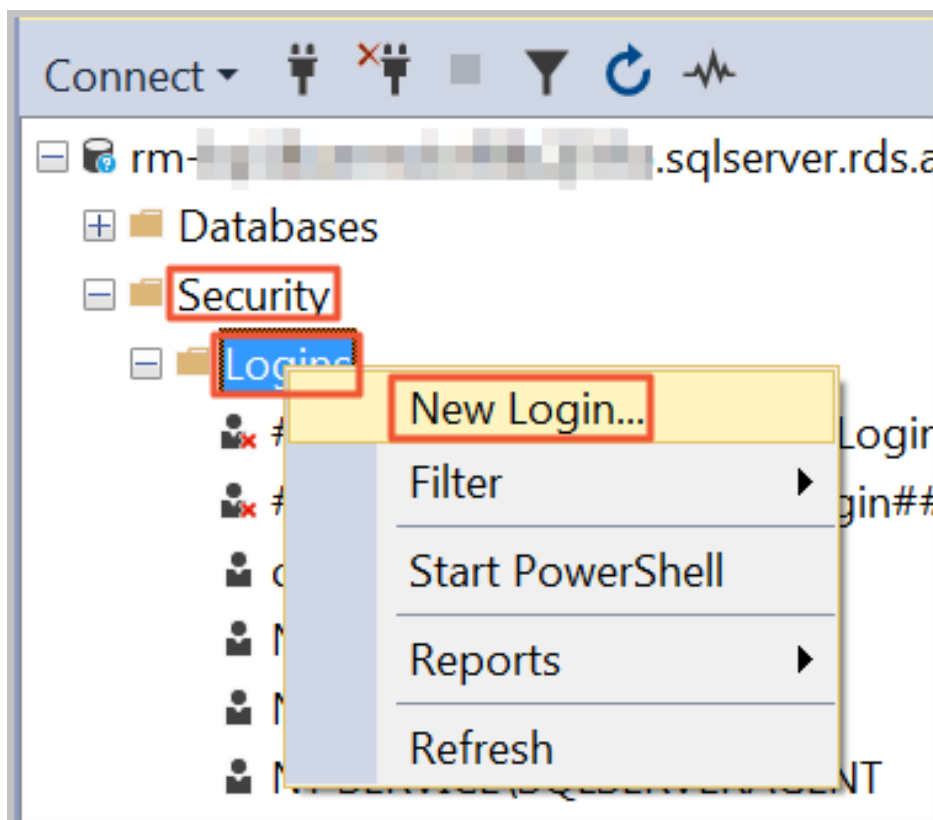


新しいデータベースの作成が正常に終了すると、そのデータベースが **[Databases]** に表示されます (下図を参照)。

注意: デフォルトの **[System Databases]** でなんらかの操作をすることはお勧めしません。



[Security] を選択し、[Logins] を右クリックします。[New Login] を選択して RDS インスタンスに一般アカウントを作成します (下図を参照)。



新しいアカウントの名前とパスワードを入力し、デフォルトのデータベースを選択します (下図を参照)。

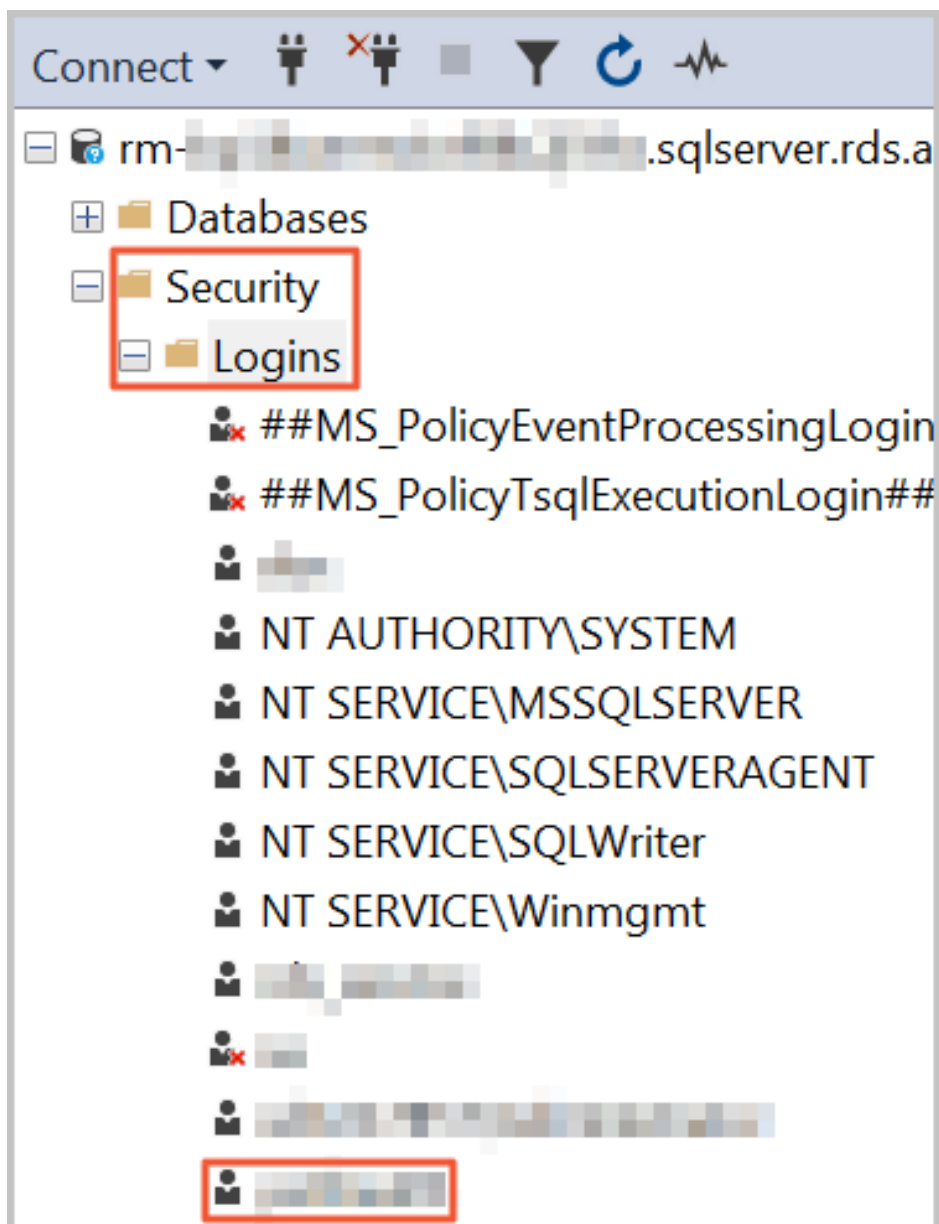
注意: [SQL Server authentication] を選択し、ビジネス要件に応じてその他のパスワードポリシーを調整します。

The screenshot shows the 'Login - New' dialog box with the following details:

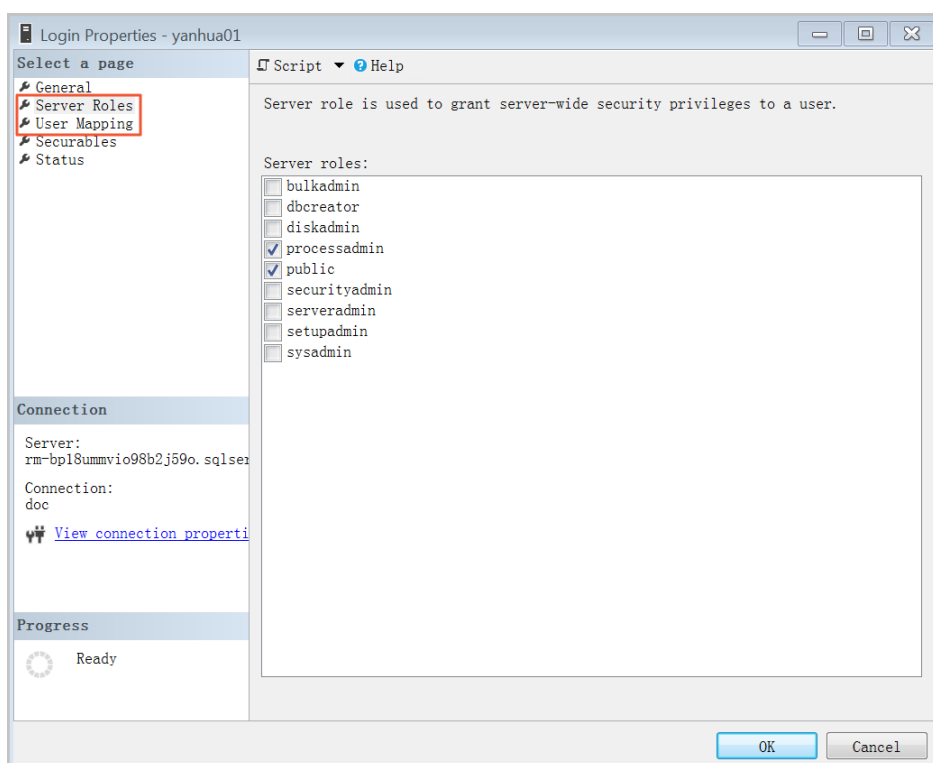
- Left Panel:** 'Select a page' with 'General' selected. Below it, 'Connection' shows server and connection details. 'Progress' shows 'Ready'.
- Main Area:**
 - 'Login name:' text box (highlighted).
 - 'Password:' text box (highlighted).
 - 'Confirm password:' text box (highlighted).
 - 'Specify old password' checkbox is unchecked.
 - 'Old password:' text box.
 - 'Enforce password policy', 'Enforce password expiration', and 'User must change password at next login' are all checked.
 - 'Mapped to certificate', 'Mapped to asymmetric key', and 'Map to Credential' are all unchecked.
 - 'Mapped Credentials' table is empty.
 - 'Default database:' dropdown is set to 'master' (highlighted).
 - 'Default language:' dropdown is set to '<default>'.
- Buttons:** 'OK' and 'Cancel' buttons at the bottom right.

[OK] をクリックします。

新しいアカウントの作成が正常に終了すると、そのアカウントが [Security] > [Logins] に表示されます (下図を参照)。



新しいアカウントをダブルクリックしてプロパティを設定します。[Server Roles] タブページでこのアカウントを認証し、[User Mapping] タブページでアカウントを特定のデータベースにバインドできます (下図を参照)。



[OK] をクリックします。

SQL Serverクライアントを使用してRDSインスタンスに接続できます。この記事では、Microsoft SQL Server Management Studio (SSMS) クライアントを例として接続手順を紹介します。

背景情報

RDS for SQL Server は SQL Server と完全に互換性があるため、同じ方法を使用してデータベースに接続できます。この記事では、SSMS クライアントを例としてRDSインスタンスに接続します。他のクライアントを使用している場合でもこの方法を参照できます。クライアント経由でRDSインスタンスに接続する場合、接続アドレスの選択 を参照し、次の点を注意してください。

クライアントが同じリージョンにある ECS にインストールされ、接続する RDS インスタンスと同じネットワークタイプを使用している場合、イントラネットアドレスを使用します。

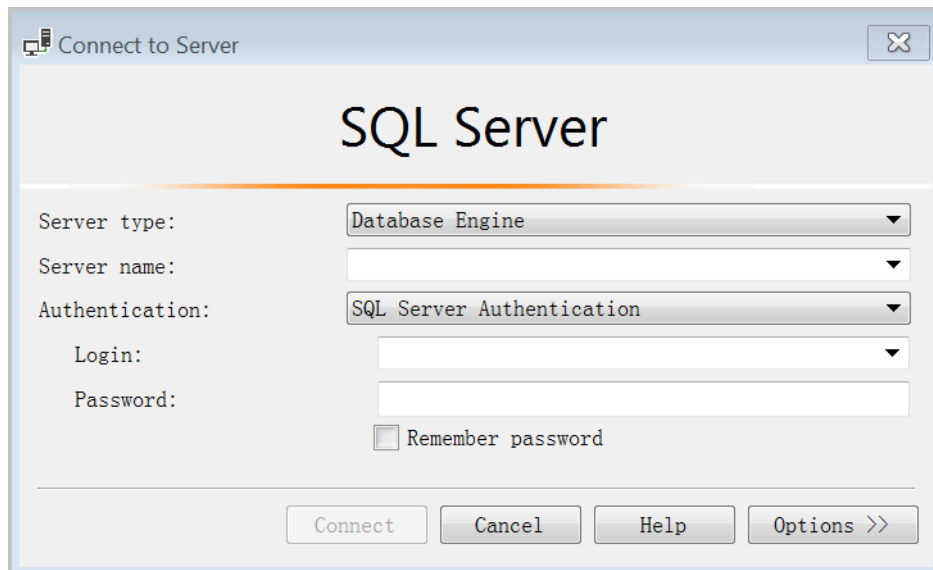
上記以外の場合はインターネットアドレスを使用します。

操作手順

RDSインスタンスにアクセスするIPアドレスをRDSホワイトリストに追加します。ホワイトリストの設定方法については、ホワイトリストの設定 を参照してください。

Microsoft SQL Server Management Studioクライアントを起動します。

下記の図に示すように、接続情報を入力します。



パラメータの説明:

サーバータイプ: **データベースエンジン**を選択します。

サーバー名: インターネット/イントラネット アドレスとポート番号で構成されます。 接続アドレスとポート番号はカンマで区切ります (例: rm-bptest.sqlserver.rds.aliyuncs.com、3433)。次は、RDS インスタンスの接続アドレスとポート情報を表示する手順を示します。

[RDS Console] にログインします。

対象インスタンスのリージョンを選択します。

インスタンスのIDをクリックして、「**基本情報**」ページにアクセスします。

[**基本情報**] ページでは、インスタンスのインターネット/イントラネットアドレスとインターネット/イントラネットポート番号を確認できます。

基本情報		ホワイトリストの設定	移行ゾーン	↑
インスタンス ID: rm-00000000000000000000	名前: rm-00000000000000000000			
インスタンスのリージョンとゾーン: Asia Pacific NE 1 (Japan)ゾーンA	インスタンスタイプ: 標準インスタンス (rds.status.category:HighAvailability)			
イントラネットアドレス: rm-00000000000000000000.mssql.japan.rds.aliyuncs.com	内部ポート: 3433			
インターネットアドレス: rm-00000000000000000000.mssql.japan.rds.aliyuncs.com	外部ポート: 3433			

Authentication: **[SQL Server 認証]**を選択します。

Login: RDSインスタンスの初期アカウント名を参照します。

Password: RDSインスタンスの初期アカウントのパスワードです。

[接続] をクリックします。

付録

SQL Server 2008 R2 と SQL Server 2012 (日本サイトでは**未提供**)では、機能と API にいくつかの相違点があります。詳細は次のとおりです。

機能の相違点

API の相違点

機能の相違点

機能	SQL Server 2008 R2	SQL Server 2012(日本サイトでは未提供)
データベースのバックアップとリカバリ	利用可能	利用可能
Anti-DDoS	利用可能	利用可能
IP ホワイトリスト	利用可能	利用可能
SQL インジェクションや総当たり攻撃のブロック	利用可能	利用可能
マスター/バックアップアーキテクチャ	利用可能	利用不可
ローカル耐障害性	利用可能	利用不可
リモート耐障害性	利用可能	利用不可
オートスケーリング	利用可能	利用可能
SSIS	利用不可	利用不可
SSAS	利用不可	利用不可
SSRS	利用不可	利用不可

Service Broker	利用不可	利用不可
分散トランザクションコントローラー (DTC)	利用不可	利用不可
サーバーへのリンク	利用不可	利用可能

API の相違点

API	インターフェイス名	SQL Server 2008 R2	SQL Server 2012(日本サイトでは未提供)
ゾーンへの移行	MigrateToOtherZone	利用可能	利用不可
イントラネットアドレスのリクエスト	SwitchDBInstanceNetType	利用可能	利用不可
インスタンスのアクセスモードの変更	ModifyDBInstanceConnectionMode	利用可能	利用不可
アカウントの作成	CreateAccount	利用可能	利用不可
データベースの作成	CreateDatabase	利用可能	利用不可
アカウントへの権限の付与	GrantAccountPrivilege	利用可能	利用不可
アカウントの権限の取り消し	RevokeAccountPrivilege	利用可能	利用不可
ファイルのアップロードアドレスの取得	CreateUploadPathForSQLServer	利用可能	利用不可
データのインポート	ImportDataForSQLServer	利用可能	利用不可
他のインスタンスへの移行	ImportDatabaseBetweenInstances	利用可能	利用不可
移行のキャンセル	CancelImport	利用可能	利用不可

Microsoft SQL Server のバージョン間の機能比較

Microsoft SQL Server 2012 のバージョン (EE/SE/Web) の機能の違いについては、SQL Server 2012 のエディションでサポートされている機能を参照してください。

Microsoft SQL Server 2016 のバージョン (EE/SE/Web) の機能の違いについては、SQL Server

2016 のエディションとサポートされている機能 を参照してください。